

人生の苦しみを乗り越えるために^①

ルー・マリノフ

栗津賢太 訳

一 「苦諦」から導き出される二つの推論

釈尊が説いた「四諦」は、仏教徒以外の人々にも非常によく知られています。四諦の第一にあげられる「苦諦」は、多くの人がいずれば経験によって知ることでしょう。^②ほとんどの赤ん坊は、笑いながらではなく、泣き叫びながらこの世界に生まれてきます。^③笑うにも、涙を流すにも、何らかの理由があるものです。しかし、泣き叫ぶのは、ただ苦しいからでしょう。それゆえ、人生における重大問題は、人は苦しむのかどうかとい

うことではなく、何から苦しみを受けるかということですからありません。むしろ、苦しみとどうやってつきあっていくかということなのです。本稿では、人々が苦しみに対処するための一般的な五つの方法が明らかにされます。はじめの三つの方法は、賢明なものとはいえず、四番目の方法はそれよりはましですが、もっともよいのは最後の方法です。

その五つの方法に言及する前に、苦諦の概念から導かれる二つの推論について述べておきましょう。まず私たちは、自然主義的な推論に直面します。すなわち、

苦しみを生み出す能力は、苦しみを軽減する能力と同じく、知覚機能が高まるとともに増大するという考え方です。より高い知性のもち主は、自らの道徳的な羅針盤が指し示す方向にしたがって、より多くの残酷な行為を生み出しもするし、慈悲深い行為を生み出しもします⁽⁴⁾。人類は、この惑星上でもっとも高い知覚機能をもっている（他の惑星により高い知覚機能をもった存在がいることが望まれることもあるが）ので、苦しみを生み出す能力とともに、それを軽減させるもっとも大きな能力をもつのです。このような自然主義的な見解からは、ある道徳的な推論が導かれます。すなわち、苦しみは不愉快なものであり、時には有害なものなので、自分自身と他者の人生をできる限り楽しく希望に満ちたものとするためには、私たちにそれらの苦しみを軽減する義務があるという推論です。

次に、（物理的に）現存するあらゆる形態の生命は、ある根本法則によって統治されていることを考える必要があります。森羅万象は無常です。人生は無常であり、人間関係も無常であり、仕事も無常であり、名誉

も富も無常であり、そして喜びも悲哀もまた無常なのです。

たとえそうだとしても、こうした流転をつかさどる法則には、（他の多くの自然法則に照らして考えてみても）ある不均衡があるようです。つまり、悲哀は喜びよりも長い間持続し、痛みは快楽を抑圧し、苦悩は歓喜を上回るように思われるのです。このように、苦しみと無常が存在することによって、人生は、幸せなものではなく悲しいものだと考えられるようになります。各々の幸福がつねに悲しみを帯びているようにみえるのに対し、すべての悲しみが幸福感を帯びているというわけではありません。こうしたことから、多くの人々は、人生はそもそも不公平なものであると、失望してしまいます。また、時間の経過とともにエントロピーが増大するように、時とともに苦しみも募っていくと思つて、失望するのです。こうした見解は、エントロピー増大の法則には当てはまりますが、悲しみには当てはまりません。このような見解は、実際に悲哀を現実化させてしまうのです。より賢明に生きるため

には、無常や不均衡を、より賢く生きるための課題あるいは変則的なものとして解釈することが必要です。それは、恒久の慈悲深い法則を追及することによって行われるのです。苦諦は、わけもなく増大するのではないし、わけもなく人々にとり憑くのもありません。むしろ、苦諦という概念の目的は、苦しむという感覚能力が鈍っている場合に、それを警告することと、それを克服する方途を示すことなのです。

二 痛みと苦しみ

「痛み」と「苦しみ」は、しばしば互換的に使われますが、ここで用語の整理をしておきたいと思ひます。私たちの知識が不完全なために、これらの用語を明確に区別することはむずかしいのですが、両者を区別することは重要です。

けがや病気などで肉体的に損なわれることは、多くの場合、痛みの原因となります。痛みは肉体的な感覚です。つまり、痛みは、しばしば肉体的に何かがおかしいことを告げる警告なのです。もしもあなたが、不

注意から熱いストープの上に手を置いてしまった時、何の痛みも感じないとすれば、火傷をしてしまうでしょう。同様に、もしも虫歯の痛みを感じなければ、歯を失うことになるでしょう。「幻影痛（phantom pain）」と呼ばれる切断後の四肢に感じる痛みや、痛みのない癌細胞の転移などの例外はありますが、全体的にいつて、痛みには、肉体的な異常があることを知らせ、注意を喚起する意味があるのです。

一方、苦しみは何らかの精神的な状態です。それは、気分を害することであり、苦しみを感ずるためには、自ら進んで「共犯者」にならなくてはなりません。痛みが、他者によって味わわれるものであるのに対し、苦しみは、自分自身が参画することによってはじめて生じるのです。そして、皮肉なことに、あなたにもっとも近い人、そしてあなたのことをもっともよく知っている人が、あなたをもっとも苦しめる人である場合が多いのです。なぜでしょうか。それは、彼らが、何があたを動揺させるのかを知っているからであり、また、あなた自身を苦しみの共犯者を仕立て上げるに

はどうすればよいかを正確に知っているからです。一方、別の極端な例をあげれば、あなたのことをまったく知らない人——つまり見知らぬ人——もまた、あなたにもっとも苦しみを与えることができます。なぜでしょうか。それは、彼らが、あなたの人間性を無視して、耐え難い状況を押しつけることができるからです。しかしながら、痛みが他者（あるいはあなた自身）によって与えられるのに対し、苦しみは他者から与えられるのではないことを、よく理解してほしいと思います。外的環境に影響されて、自分に苦しみを与える傾向を増大させたり減少させたりすることはあるでしょう。しかし、その苦しみはあなた自身のものなのです。あの意味で、これはとてもよい情報です。というのも、苦しみがあなた自身のものであるならば、あなたはそれを否認することもできるからです。痛みについてはそうはいかず、否認することは非常にむずかしいのです。

とはいえ、痛みと苦しみはしばしば結びついていきます。病氣 (disease) が急性あるいは慢性的の痛みを引き起

す。直面することになります。それは哲学的な苦しみです。一方、躁うつ病の場合のように、治るよりも病気でいる方が好まれることもあります。薬を用いると、深く落ち込むうつ状態を防ぐことができますが、同時に、興奮と創造性の頂点である躁状態が切り捨てられてしまうからです。最高の創造性⁽⁵⁾の状態を得られなくなってしまうくらいならば、むしろ周期的なうつ状態を辛抱しようとする人もいます。そうした選択をする⁽⁶⁾と、単純にいえば、「災難が避けられなければ、どちらか小さい方を取れ」というアリストテレスのカテゴリに陥り、より複雑にいえば、合理的選択⁽⁶⁾の近代的パラダイムに陥ることになります。

哲学は、苦しんでいる人々の役に立ちますが、急性の苦しみにはよりいっそう役に立つものです。哲学的な指針や、何らかの対話療法 (talk therapy) を求める人々は、通常、何かによって苦しんでいます。彼らは、脳障害によって苦しんでいるわけではありません。肉体的にも精神的にも健康であっても、苦しい状況を作り上げ、増大させてしまうような環境に直面しているの

こす場合、しばしば同時に、急性あるいは慢性的の心地悪さ (dis-ease) を引き起こします。まずはじめに、痛みが身体を傷つけ、次に、その痛みが心の中に反響したものが苦しみなのです。たとえば、「偏頭痛によって苦しむ」といいます。それは、偏頭痛が突発的な痛みや、その他の不快な症状の原因となっているということであり、その痛みや不快感や無力感のために心地悪い (苦しい) ということです。もし、あなたの苦しみの原因が痛みだけなのであれば、苦しみを軽減するためには痛みを軽減しなければなりません。それは医学上の問題であり、哲学的な問題ではないのです。

同様に、脳機能の障害によって慢性的なうつ状態にある人々は、障害の反響によって慢性的に苦しみます。障害によって脳自体が痛みを感じることはありませんから、一般的にこのような人々は、痛みではなく、苦しみを感じているのです。それでも、脳神経の化学的な機能障害を治す薬を用いることによって、その苦しみは軽減されます。少なくとも、ある種の苦しみはな

くすことができるのです。そうすると、道徳的葛藤に割を首尾よく果たしていたのです。

要約しましょう。痛みは病から起こり、苦しみは心地悪さから起こります。たとえば、心筋梗塞 (heart attack) は肉体的な痛みを引き起こしますが、「傷心 (broken heart)」は情緒的苦悶や精神的な苦しみを引き起こします。意のままに痛みを和らげることはできませんが、心地悪さの原因がわかれば、確実に苦悶や苦しみを軽減することはできます。もしもあなたが、心筋梗塞になったとすれば、自分ではどうすることもできないでしょう。しかし、もしもあなたが、病気でなく、心地悪さからくる傷心を経験しているのであれば、それを改善するための多くのステップが存在するので

す。

因になりうるのに対し、苦しみには大きな影響を与えるのは、その人の痛みに対する態度や、痛みに対する許容量なのです。もしもあなたが、未治療の病氣や治療の後遺症によって痛みを感じているのであれば、おそらく苦しみも感じるでしょう。しかし、マラソンや登山などの激しい運動で痛みを感じているのであれば、ふつうの意味での苦しみは感じないでしょう。爽快感さえ感じるかもしれません。いわゆる「ランニング・ハイ」です。一般的に、その人がもつ痛みの許容量は、生まれつきのものといえましょう——許容量を増大させるやり方を学ぶことはできるのですが。他方、苦しみについては、話は別です。ある苦しみから必要以上に大きな影響を受けることもあるでしょう。しかし同時に、その苦しみを最小限にし、あるいは消し去る方法を学ぶこともできるのです。

三 苦しみに対処する五つの方法

人々が苦しみに対処するには、次の五つの方法があります。①自分の中にとどめておく、②逃避する、③

他者に転嫁する、④自分の中で終わらせる、⑤より有益なものへと転換する、です。はじめの三つはお勧めできません。というのも、この方法は、苦しみを軽減するよりも、むしろ増大させてしまうからです。第四の方法はまだありますが、最終的には欠陥があります。そして、もっともよいのは、第五の方法です。ここで、これらの方法を順番に手短かに検討し、私の哲学的カウンセリングの実践からの事例もあげてみましょう。

(一) 自分の中にとどめておく

一般的な(そして理想とはほど遠い)戦略は、苦しみをあなたの内部にとどめてしまい、「沈黙の苦しみ」としてしまうことです。おそらくこの方法は、どことなく高潔な方法であると教えられてきたかもしれませんが、実のところ必要のないものです。この方法では、喜びや自己実現が不必要に奪い取られてしまうのです。ここでは、苦しみは、来世で幸福になるために必要な準備であると信じられているのかもしれませんが。あるいは、他者によって吹き込まれた、あなた自身について

の誤った信念(belief)が、生き生きとした本当のあなたを妨げているのかもしれませんが。信念というものは、遺伝によって決定されるのではなく、文化的な伝達によって獲得されます。あなたに苦しみをもたらす信念を、喜びをもたらす信念に置き換えることができるのです。ただし、それができるかどうかはあなた次第です。世界にはあらゆる種類の信念が満ちあふれており、あなたはどれでも手に入れることができます。そして、有害な信念ではなく、有益な信念を見つけることができるかどうかは、やはりあなた次第なのです。その際、苦しみは、(人生における他のものと同じように)ある種の指針となることができます。そして、あなたが苦しみから何かの教訓を学んだならば、それを「卒業する」ことが許されるのです。

【ルースの事例】

ルースは、五十年以上もの間、必要のない苦しみを負ってきました。彼女は、本来、非常に創造性に満ちた人間——とりわけ言語に関して——で、ジャーナリ

ストか作家になりたいと強く望んでいました。しかし、強烈な労働倫理をもった移民である両親は、文字文化をあまり理解しませんでした。一九三〇年代の経済不況の時代、ルースと姉のアリスは、家計を助けるために学業を断念しなければならませんでした。その後、彼女たちはビジネスマンと結婚し、子ども育て、パートタイムやフルタイムで事務仕事を続けました。しかしルースは、つねに、自分の内部に創造的な作家が「閉じ込められて」いて、外に出たがっていると感じていたのです。内部に作家が監禁されているという感覚が、彼女の苦しみの原因となっていたのです。しかし、彼女の両親も姉も、この種の創造性を理解しませんでした。彼らは、九時から五時までのタイムレコーダー、安定した給与、伝統的な向上心などからなる「現実世界」の住人だったのです。彼らにとってはそれでも良かったでしょうが、ルースの場合は違っていました。しかし、ルースが作家になりたいという願いを語った時には、きまって、空想や白昼夢だと決めつけられたのでした。かつて、ルースは、ジャーナリスト見習い

の仕事を持ち込まれたことさえありましたが、断ってしまいました。なぜだったのでしょうか。彼女には自信がなかったし、不幸なことに家族からの励ましもなかったからです。

そこでルースは、不況時代さえなかったならば作家になっていたはずだという、小さな自分なりの物語を作り上げました。その後、なぜ学校へ戻らなかったのか——その時はまだ子どもだったので、そうすることができなかったのだ。子どもたちが成長した後はどうだったのか——その時は、仕事で多くの責任をおっており、職場を去るわけにはいかなかったのだ、という風に。一方、彼女は、得意なクロスワードパズル遊びで満足しようとしていました。しかし、彼女の内なる創造的な作家は、その間ずっと「終身刑」を受け続けていたのです。彼女は、何十年の間、環境さえ妨げなければ作家になっていたのだという物語を繰り返ししました。しかし、その物語は真実ではありませんでしたし、彼女は自らを偽り続けることに苦しみました。ルースは、表面上の明るい人格とは裏腹に、創造的な自己実

現ができず、人生から苦い思いを深く味わっており、これらのことによって内面で強く苦しんでいたのです。

結局、この作家は解放されたのですが、それは、ルースが自分についての誤った信念を放棄した後のことでした。「ソクラテスの産婆術」——対話によって自身についての誤った信念を明らかにし、変化させるやり方——の助けによって、ルースはついに、次の事実になるのを妨げていたのは彼女自身であったということ、そして、環境をいいわけにしていただけだということ、そして、このような長い年月の後に信念を変え、これは、大変な勇気のいることでした。しかし、信念を変えるやいなや、内なる作家はたちまちにして開花したのです。現在、七十代のルースは、創作コースを受講するとても成熟した学生であり、ここ数年で詩と短編小説を何冊か著しました。その中のいくつかは、出版すらしています。人生は新たな意味をもち始め、彼女は深い満足感を味わっています。彼女は、長い苦しみから解放されたのです。

教訓——苦しみを自分の中にとめてしまうことは、高潔なことかもしれませんが、解答にはなりません。どれほど長い時間がかかろうと、苦しみの原因を探し出すことが、最上の方法なのです。

(二) 苦しみからの逃避

この方法には、魅惑的な響きがあり、英雄的な雰囲気があります。ハリウッドにおいて、脱走というテーマが長年にわたって人気があるのは、偶然ではありません。観客は、脱獄映画を愛しているのです。「大脱走 (The Great Escape)」「パピヨン (Papillon)」「終身犯 (Birdman of Alcatraz)」「ショーシャンクの空に (The Shawshank Redemption)」などの映画には、主人公が脱獄することによって苦しみから逃れるという共通のテーマがあります。しかしながら、私たちがここで検討している種類の苦しみは、身体的に厳重な監禁状態に置かれた苦痛から生み出されるものではありません。むしろ、ありふれた生活の中で生じるものであり、人々は、意図せずに、無意識的あるいは不可避免的に、自ら

を囚人としてしまい、それから逃れようとするのです。

自らの苦しみに責任がある人々は、その苦しみに立ち向かい、真の原因を理解し、それを取り除かない限り、それから逃れることはできません。自ら生み出した苦しみから逃れようとする企ては、失敗するばかりではなく、苦しみをいつそう悪化させることも多いのです。攻撃と逃避は、人間のもっとも古い生物学的な衝動の一つであり、脳のもっとも原始的な部分に強く結びついていて、間違いなく精神にも反映しています。苦しみは安寧に対する脅威であり、この脅威に対して攻撃や逃避をすることは、自然な性行なのです。

しかし、その苦しみが、自ら生み出したものである場合には、それに立ち向かうことなしに闘うことはできませんし、そこから逃れることもまったくできないのです。もしも、あなたが苦しんでいる時に、世界のどこへでも（あるいは宇宙のどこへでも）自由に旅をする機会が与えられたとしたら、あなたは旅をするでしょうか。たしかに、気持ちを紛らわせるために、あるいは一時的な逃避のために、旅をすることもできるでし

よう。しかし、たとえどこへ行こうとも、苦しみは影のようについてくることは、十分ご承知の通りです。それでも人々は、(酒や麻薬や人間関係やカルトなどの)苦しみを取り去ってくれそうなもの、あるいは苦しみとの間に時間と空間や意識状態の変容を置いてくれそうなものに、逃避しようと企てることでしよう。しかし、逃避は一時的なものに過ぎません。元気でいたい人、苦しみたくない人は、苦しみに立ち向かい、それを克服する方法を見つけないならならぬのです。

釈尊は次のように述べています。「大空の中にいても、大海の中にいても、山の中の奥深いところに入っても、およそ世界のどこにいても、悪業からのがれることのできる場所はない」。

しかし、自分で生み出したものではない苦しみの場合は、逃避したり攻撃したりはできません。そこでは、正直なところ、薬も哲学もあまり役には立たないのです。極度の統合失調症、躁うつ病、内因性の臨床うつ病をはじめとする脳機能障害をもつ患者は、自らの苦しみを軽減する能力を奪われています。それらは、

(三) 他者への苦しみの転嫁

もう一つの、非常によく用いられる戦略は、苦しみを誰か他の人に押しつけてしまおうとすることです。ひとことではいえず、納屋のニワトリの「つつきの序列 (the barnyard pecking order)」〔訳者註 動物生態学者シエルデラップ・エッベが一九二二年に明らかにしたもの。ニワトリ小屋のニワトリでは、すべての仲間をつつくもつとも強い個体(独裁者)から、すべてにつつかれるもつとも弱い個体(エッベはシンデレラと呼んだ)までの間に直線的な序列があるという。〕の人間版のようなものです。たとえば、上司があなたを怒鳴りつけ、あなたが自分の子どもを怒鳴りつけ、子どもは飼犬を蹴っ飛ばす、といったことです。ところが、不幸なことに、苦しみは野球とは違います。苦しみを他の人に投げつけばことが済むというものではないのです。この方法を試してみれば、苦しみがかけ算のように増えることがわかるでしょう。他者に転嫁することによって苦しみを取り除くことはできないのです。この世に存在する苦しみを増大させてしまうだけでしょう。他

自らが生み出した苦しみではありません。それは、病氣 (disease) の問題であって、心地悪さ (dis-ease) の問題ではないのです。これらの病状を安定させる薬はありますが、いまだに自殺を企てる患者も多いのです。彼らは、たとえ才能があり、愛されていて、大いに他者の役に立てる力をもっているとしても、存在自体の苦しみに耐えられないと感じます。また、知られる限りすべての薬を試し、あらゆる哲学を学んでも、この世には自分の苦しみを止める方法がないからといって、無謀な生活を送り、自殺に近いような死に方をしてしまう者もいます。このような不幸な人々——なかには本心に立派な人もいますが——にとっては、人生それ自体が耐えられないほど不幸なものであり、彼らができる唯一の方法は、戦うと同時に逃避し、人生を終わらせてしまうことなのです。彼らにとって、死は究極的な脱獄です。しかし、後に残っていた人々にとては、それは新たな苦しみの始まりにすぎません。

者を自分の苦しみに巻き込もうとすると、倍化してまいります。というのも、第一に、もともと実際に困らされていることによって苦しみ、第二に、他者を巻き込めばその苦しみが軽くなるという、誤った考えによって苦しむのです。

このような不適切な方法の、もつとも身の毛のよだつ例としては、連続殺人者、テロリスト、暴力団、大虐殺などによる行為があります。彼等は、他者を害することに飢えている「地獄の住人」であり、実際に殺してしまふのです。彼らは、平気で、犠牲者に苦痛や苦しみを押しつけ、犠牲者の友人や家族に生涯にわたる長い苦しみを強いるのです。彼らの中には、他者を人間として認め、対処することができない者もいます。おそらく彼ら自身、自分に対しても同じことなのでしょう。池田大作は、テロリストについて、「人間の苦しみや悲しみ、痛み、嘆きなどにはまったく不感症で、あのような蛮行に走ってしまう」⁽¹⁰⁾と指摘しています。同じことが、世界に苦しみを拡大させようと謀る者たちにもいえます。人間が本来そなえる諸要因や、通常

の人生のプロセスによってだけでも、すでに十分すぎるほどの苦しみが存在します。それなのに、なぜ、さらなる困難をもたらそうとするのでしょうか。周囲に苦しみを撒き散らすことは、自分自身にとっても、他のすべての人々にとっても、きわめて最悪の方法なのです。

このような有害な道を進もうとする人々は、長くもちたえることはできないし、邪悪な目論見は達成することもありません。彼らが個人として行動しようと、あるいは、有害な意思の実現のために国家全体の資源を悪用しようと、この世界のどこにも、彼らが逃れる場所や迎え入れる安全な港は存在しないことが判明するでしょう。彼らは追跡され、攻撃され、非難されます。そして、最終的には、法廷の場で、その行為にふさわしい判決を受けることになるのです。彼らは、一時的には苦しみを他者に撒き散らすことができるかもしれませんが、長くは続きません。世界のすべてを苦しみで満たすことなどできないし、彼らの「地獄」を世界に受け入れさせることもできないのです。老子は、

「人殺しを楽しむ者は、天下において、志を果たすことはできない⁽¹⁾」と述べています。

(四) 自分の内部で苦しみを終わらせる

もしもあなたが、自分の中だけで苦しみを終わらせることを選ぶなら、自分にとっても他者にとってもよいことです。もしもあなたが、病気で苦しんでいるならば、その病気はあなたの身体の中にあり、身体の中で消滅させられなければなりません。しかし、心地悪さからくる苦しみの場合、様子が異なります。それはなぜでしょうか。病気とちがって、心地悪さが存在することを認めるのは、かなり難しいようです。自分の中で苦しみを終わらせるためには、自分の心の中にあるものに責任をもたなければなりません。少なくとも短期的には、他者を非難することのほうが簡単でしょう。「彼が私を不幸せにする」とか「彼女は私を理解していない」、あるいは「社会は私を不公平に扱っている」などと非難することです。それに対して、あなたの信念や望みの中に自分の利益に反するものがあるこ

とを認めるのは難しいでしょう。それに対して何ができるかを考え出すことは、よりいっそう難しいことでしょう。しかしながら、長期的にみれば、あなたの苦しみを終わらせる唯一の方法は、苦しみと縁を切ることです。そして、そうするためには、まずは苦しみが存在することを認めなくてはならないのです。

【フィリップの事例——因果は巡る】

ハンサムで冷酷な、女たらしのフィリップは、他人に与えた苦しみが自分に返ってくるというをついに学びました。そして、自分の中でその苦しみを終わらせようと、最初の一步を踏み出したのです。

野心に燃えるニューヨーク在住の男優であった三代前半の頃、彼は、知的で、はっきりと物をいう、とても押し出しの強い青年でした。マンハッタンには、いつも、彼のような男性が何百人も（私の知る限りでは何千人も）いて、大きなチャンスを持ち望みながら、次の仕事の契約を待っているのです。フィリップには、彼を待ち受ける多くの女性たちがいました。彼は、フ

ランス人のいう「えもいわれぬ」魅力、すなわち、明らかに冷淡さの入り交じった、女性を虜にせずにはおらない魅力をもっていたのです。さまざまな年齢と社会的立場の女性たちが、フィリップと恋に落ちました。彼は、彼女たちと、短く強烈な恋愛関係をもちましたが、その関係はすべて一方的に終わりを迎えるのがつねでした。彼は、ある日突然、あっさりと彼女たちを捨て、二度と顧みることはなかったのです。彼の通った跡には、多くの傷ついた女性たちが残され、彼自身もいくばくかの悲哀を感じることもありました。しかし、あくまでも彼自身のための悲哀であり、女性たちの悲哀ではありませんでした。彼は、そうした関係に飽くことがありませんでした。それを問題と感じていたわけではありません。彼は、哲学的にいえば、「唯我論 (solipsism)」と呼ばれる状況にあったのです。

唯我論者はナルシストとは区別されます。ナルシストは、他の誰よりも自分自身を愛することを好むものです。彼らは、多くの場合、他の誰をも愛さないし、愛せないからです。しかし彼らは、自分がいかに愛す

べき人間であるかを「実証 (validate)」するために、自ら選んだ他者を自分の世界へ引き寄せようとしています。このように、ナルシストは葛藤をはらんだ存在であり、他者に認知されたいという葛藤を、完璧に見える外見の中に隠しているのです。一方、唯我論者も似たような強烈な自己意識や自己陶醉 (self-absorption) をもちますが、彼らは、傍らに他者がいることを否定します。

唯我論の古典的な哲学上の問題は、他者の心の問題です。あなたは自分に心があることを知っていますが、他の人々にも同じように心があることを、どのように知るのでしょうか。世界について入手できるデータはすべて、あなたの心の中でのみ処理されます。あなたは、他者の身体を感じることはできませんが、その心を知ることはできないのです。多くの人々は、理性的で寛容なので、他の人々も自分たちとほとんど同じような存在であると考えます。あなたに心があるから、他者にも同じように心があるのだと。しかし、唯我論者はそうは思いません。宇宙は唯我論者を中心にして回っていると考えられるのです。なぜなら、彼らにとって、

他者が心をもっているのかどうかは定かではないからです。それは極端に懐疑的な立場です。しかし、懷疑主義は、哲学者たちをおじけづかせるものではなく、むしろ、しばしば哲学者たちを励ますものです。

ここで、哲学者たちの「内々の間」で語られている、唯我論に関する古いジョークをご紹介します。ある時、唯我論についての講演を行ったバートランド・ラッセルに、賛辞を述べた女性がいました。「ラッセルが唯我論者であることを知ってうれしい。私も唯我論者である。私たち以外にもっと多くの唯我論者がいればよいのに」と。このジョークが理解できない人は、もっと哲学的な考え方を身につける必要があります。ここでのポイントは、個々の唯我論者は世界には自分しか存在しないと考えているという点です。他の心が存在しないのなら、他の唯我論者もまた存在しはずなのです。

さて、唯我論者としてのフィリップが抱える問題点は、デートをして捨てた女性たちを、傷つけたとは考えない点にありました。彼にとって、彼女たちは、身

体的には存在していましたが、真の意味では存在していなかったのです。彼のネメシス (復讐の女神) であるキャサリンと出会うまでは……。彼は、頭の先からつま先までキャサリンを愛しました。彼らはしばらくの間デートを続け、強烈なロマンスを楽しみました。しかし、彼女は突然、彼を捨てたのです。このことは、彼をかなり苦しめました。彼が抱いた大きな疑問は、「彼女はなぜ、僕に対してあんなにも冷たく振舞えるのだろうか。彼女は僕を愛していると思っていたのに」というものでした。

その時、突然、フィリップは唯我論者ではなくなりました。彼を愛していたはずのキャサリンの心中を想いはかったのです。彼にとって、これは天啓でした。カルマの哲学や道徳的な因果論について、深く考えさせたのです。彼がキャサリンの突然の拒絶に苦しめられた原因は、おそらく、彼がこれまでにたくさんの女性たちを突然拒絶してきたという行為なのです。人間の行為にまつわる因果律がこのように単純であることはめったにありませんが、ある人の行為が年月を経た

後にその人に返ってくるということは、真実であるように思われます。フィリップの苦しみは、価値ある教訓となりました。彼は、他の人々も苦しむということを学んだのです。さらに、唯我論的な人間関係がすべての苦しみの原因になったのだということを学んだ彼は、その苦しみを、新しい人間関係によって緩和しようとはしませんでした。

その代わりに、彼は、きわめて勇気のいる別の方法をとりました。自分の中で苦しみを終わらせようと決心したのです。そして、宗教的な道を選びました。修道院での祈りや瞑想や禁欲の生活に入ったのです。彼はおそらくは彼自身と他の人々のために多くの良い行為をし、確かに苦しみを軽減することになったでしょう。

もしもあなたが、自分自身の中で苦しみを終わらせようとするならば、それは可能です。苦しみを終わらせるための方法は、あなた自身で発見することも発明することもできるでしょう。また、役に立つ哲学的な考え方も多く存在します。この方向には、多くの道が

あり、手助けとなるような慈愛に満ちた指針もあります。自らそこに立つ人には、それらが存在するのです。こうした方法は、仏教用語では、「上座部（小乗）」という言葉もあるが「小さな乗り物」という偏見がある」として知られています。この方法は、前述した三つの方法よりはましですが、理論的・実践的理由からいって、理想にはほど遠いものです。

理論的には、宗教的な禁欲は極端な自己否定の形態であり、極端な自己放縱の対極であるに過ぎません。釈尊の中道（the Middle Way）の哲学においては、極端な考え方は悲哀を乗り越えるための助けとはならないとされます。一つの極端から別の極端へ浮動しているうちは、中道を歩むことはできないので、その中間値を算定する必要があるのです。事実、アリストテレスや孔子、ブッダをはじめとする、もともと偉大な影響力をもつ古代世界の哲学者たちはみな、極端は避けるべきだということを認識していました。

実践的にも、自分自身の中で苦しみを終わらせることが結局は欠陥がある戦略であることには、よく知ら

れた理由があります。すべての現象が相互に関係しあっていることによる因果連関にあつては、人間同士は相互に結合しています。相互に関連していることを考えると、他の人々が苦しんでいる時に、自分だけが永遠の幸福状態の中にあることは不可能なのです。それはなぜでしょうか。人が自らの苦しみを克服する過程においては、苦しんでいるあらゆる存在に気づき、それらの存在への慈悲の思いを高めることが不可欠からです。明らかに苦しんでいる他者がいる間は、人は幸せであり続けることはできません。（上座部仏教のやり方で）個人的な救済や苦しみからの解放を獲得するためには、絶え間なく修行を行うことはできません。しかし、悲哀の海におぼれている他者がいる限り、自分だけの修行では不十分であり、無意味になるのです。救済のための必須条件は、苦しみそれ自体を強烈に認識することです。そして、その認識は、さまざまな人々によって、さまざまな周波数で「放送される（broadcast）」のです。自分の苦しみの原因について、それを根絶できるほど十分に意識的な人は、必然的に、すべての人々

の苦しみの原因にも気づき、理解できるのです。それゆえ、他者の苦しみの原因を根絶するという義務も承知しているのです。これは、いうまでもなく、大乘仏教的なあり方です。大乘仏教は、宇宙のどこかで苦しんでいる存在がある限り、個人的な救済は達成できないということをも明白に教えているのです。

（五）他者に役立つことに転換する

さて、苦しみについてあなたができる最善のことは、有害なものを、他者に役立つためのものに転換させることです。自分の中で苦しみを終わらせるのは、うまくいく限りでは、あなたにとって良いことです。しかし、もしもあなたが、他者の中の苦しみを感じ続けているのであれば、そして彼らの苦しみを終わらせるための手助けをしたいと望むのであれば、それはすべての人にとって良いことなのです。たとえあなたの苦しみを完全に捨て去ることができなかったとしても、他者の苦しみを終わらせるのに役立てることによって、自分の苦しみも軽減させることができるのです。それ

ができれば、あなたは、自身の苦しみを他者の人々の苦しみを取り除くことへと転換できるのであり、それこそ、望みうるもともと偉大な作業なのです。

【アイダの事例——苦しみの変容】

五十代のキャリア・ウーマンであるアイダは、自分に与えられた苦しみに耐えていました。ごく最近まで、彼女は、交通事故で受けたケガからの長く苦しいリハビリテーションに耐えてきたのです。一方、彼女の職業生活も変化しつづきました。保険会社の重役である彼女は、自分の会社ができるかぎり良いことを行っているのかどうかということに、ますます疑いをもつようになっています。未収保険金や口論の種となる保険金を扱うことや、保険契約者にもたらされたこれらの新たな心配事が、アイダ自身の心をかき乱しました。それで、彼女は仕事を变えたいと思いました。アイダは、相互に関係する二つの目標をもっていました。第一に、彼女にとつてもっと意味深い仕事に就くこと。第二に、もっと他者の役に立つような仕事に就くこと

です。

アイダは、哲学的な指針を求める多くの人々の例にもれず、安定しており、きちんとした人でした。おそらく彼女は、自分が達成したいことについて、しっかりと考えたをもっていたのでしょう。実際、すでに詳細な多くのことを考え抜いていました。すなわち、マンハッタンの企業という「圧力鍋」から出て、田舎に代替医療センターを開設したいと思っていたのです。はり治療、反射学、催眠療法、ホメオパシーの治療、さらには哲学的カウンセリングまでもを提供するような療養センターを開設したかったのです。

それでは、なぜアイダは哲学的カウンセリングを求めたのでしょうか。彼女が、どこから来てどこへ向かうとしているのかをすでに知っていたのにもかかわらず……。彼女は、個人的な苦しみに染められた過去と、他者の苦しみを軽減するためにささげられる未来との間の、不確かな現在というあいまいな中間地点にあって、状況を明確に定義することを求めているのです。そして、哲学が、過去と将来を結ぶ橋であると考え

えたのです。それで彼女は、その橋を作り上げるのを助け、橋を渡るのを励まし支えてくれる、哲学者を求めているのです。私がアイダに伝えたのは、まさに次のようなことです。——私が思うに、あなたの考え方はすぐれていて、その目的には価値がありますよと。彼女は、意味ある仕事への渴望と、他者の役に立ちたいとの望みを組み合わせる偉大な道を、すでに発見していたのです。

それでも彼女は、自分の使命の価値について、一般的な確認以上のものを求めていました。なぜでしょうか。それは、思慮深い人々は、人生の目的の合理化だけを求めているのではないからです。彼らは、「フォーチュン・クッキー」(おみくじなどの入ったクッキー)やシリアル箱から、洞察を得ることができのです。そして彼らは、自らの哲学的なアイデンティティを發展させようと望みます。それは、彼らが、自分の過去の経験と共鳴し、現在の状況を説明し、将来の目標を正当化するようなものを見つける方法を、必要としているということです。言いかえれば、自分の人生哲学、

自分の人生のための哲学を作り上げたいことを望んでいるのであって、単なる格言を望んでいるわけではないのです。

アイダは、分析的で、直感的にもすぐれた人物でした。私は、彼女が中国哲学との親和性をもっていると感じました。そこで、私たちは、道教の観点から彼女の状況を再解釈しました。時間をかけて、私たちは次の二点について検討したのです。

第一に、小事が積み重なって大事になるという、老子の思想です。アイダにとつての大転換は、小さなステップを徐々に経ることによって現実に達成されうるのです。したがって、一度に多くのことを行おうと悩む必要はありません。この思想によって、彼女は、移行期におけるあいまいな中間地点に平穩を見出すことができました。それはちょうど、サナギが、幼虫(芋虫)からサナギ(蝶)になる移行期間に見出す平穩と同じものでした。老子は、「世界の偉大なことはすべて、小さなことから始まる。千里の旅路も一歩から始まる」と述べています。

第二に、私たちは、老子や孔子に影響を与えた古代の中国の「相補性」に関する教説から、あらゆるものはそれと反対のものも含んでいるという考え方を学びました。アイダの過去の苦しみの中には、苦しみのない未来の状態の種子が含まれていたということです。同様に、彼女の現在の生活がまだ構築されていないことの中には、彼女が構想を描く未来の生活設計の種子が含まれているということです。

アイダは、まもなく哲学的な橋を渡り、療養センターを開設し、新しい旅へと出発しました。彼女は、私にとつて偉大な事例です。彼女は、自分の個人的な苦しみを他者に役立つことに転換しようと決意するならば、普通の人々でも偉大なことを達成できるということ、非常にすばらしい善行をなすことができるということ、実証してくれたのです。

四 自然の荘厳さの認識

この最後のセクションでは、苦しみを克服するためのもう一つのアプローチについて簡単に紹介したいと

思います。すなわち、自然の荘厳さを認識することによる苦しみの克服です。多くの動物は、身の回りの環境に対して比較的小さな変化（たとえば、鳥が森の中に作る巣のように）を加えることしかできません。（ビーバーが小屋やダムを作る場合のように）生息地においてある程度大きな変化を加えられる動物もいますが、人類は惑星規模での根底的な変化を加えることのできる唯一の動物であります。それは、森林破壊やオゾン層の破壊から海洋汚染や食物連鎖の崩壊にまでいたるものです。ニーチェは、人間を、地球の表面に寄生する存在であると考えましたが、頭のいい寄生虫は自らの宿主を殺してしまふことはいはずです。⁽¹⁴⁾ 人類の苦しみは、しばしば自然破壊によって引き起こされていることはまちがいありません。その苦しみは、自然へと回帰し、自然を認識することによって、軽減することができるとです。

法華経を基盤とする日蓮仏法は、すべての人間は潜在的には仏であるが、すべての人が自分の仏性を自覚しているわけではないと教えている。⁽¹⁵⁾ 人間の尊厳性の

偉大な現れ——覚醒、理解、優しさ、慈悲、内的平和など——は、私たちの本性の中に眠っており、それを現出するためには静寂が必要です。熱狂的な文明は、恩恵を与えるにもかかわらず、静寂とは正反対のものです。人々は、自然と交歓することによって、静寂を再発見し、内なる荘厳な性質を現出することができるとです。人間は、環境から大きく影響を受けるとともに、自然の一部として自然に働き返します。環境の美しさと静けさに浸ることによって、人間の美しさと静けさが現れてきます。自然の荘厳さに浸ることによって、人間が本来もっている荘厳さも現れてくるのです。このことは、古代以来、よく知られてきました。さまざまな哲学者たちは、自然の中の暮らしに隠遁することの効用を認識していました。インドにおける森の聖者たち、ギリシアにおけるエピクロス主義者たち、アメリカにおけるニューイングランドの超絶主義者たち、そして一九六〇年代に出現した多くのヒッピーたちは、人里離れた小さな集落に住むことによって、この上ない平和と愛と協力関係を見出したのです。一

般的に誤解されがちですが、森の聖者たちは、本来は苦行者でもなく、反社会的な隠遁者でもありませんでした。ラビンドラナート・タゴールは、「ブラフマンたちの森の生活は、人間の社会的生活と相容れないものではなく、それと調和したものであった」と書いています。⁽¹⁶⁾ 彼らは、友情のような、人生のより良きものを薫育するために、簡素な生活を求めたのです。同様に、エピクロスも、「幸福や神の祝福にめぐまれていることとは、富の多寡、社会的地位、あるいは仕事や権力とは関係がないが、自然がその限界を定めているところの苦しみからの自由と心の平安と関係がある」と述べています。⁽¹⁷⁾ また、ソローは、「人は、彼がそのままにしておく余裕があるものの数に比例して裕福です。」⁽¹⁸⁾と論じている。

幸せも悲しみも共に超える感情がありますが、それが荘厳さです。哲学を専攻する私の学生に、こんな女性がいきました。彼女は、音楽的にすばらしい才能をもちながら、それまでに音楽教育を受けたことはありませんでした。それが、私の提案によって、バロック音

楽を聴き始めたのです。バロック音楽の複雑なハーモニーや深層構造は彼女の知性に強烈に訴えかけましたが、同時に彼女は、感情的な内容によってすぐに圧倒されるようになりました。ある日、彼女は私にたずねました。「バロック音楽とはみんなこんなに悲しいのですか」と。私は、「それは単に悲しいのではありません。むしろ荘厳なのです」と答えました。

バロック音楽の作曲家の多くは、偉大な創造的な芸術家であるだけではありません。彼らは、わずかな芸術家のみが楽しむことのできた人生についての豊穡な視点——世界への窓——をもつことができるのです。その結果、生活のすべてが荘厳なものとなり、楽譜の中に荘厳さを吹き込むことができたのです。すべての偉大な音楽と同じく、彼らの音楽には、喜びと悲しみなど、すべての感情のスペクトラムの全体を貫く深い体験があふれています。だから、もしその哲学専攻の学生が、「バロック音楽はみんなこんなに喜びに満ちているのですか」とたずねたならば、私はこう答えたでしょう。「それは単に喜びに満ちているわけではありません

ん。莊嚴なのです」と。

これはまさに、あなたが自分の人生をどのように見るかという方法であります。すなわち、莊嚴なものとして見るのです。あなたは、自分の意思によって幸せになったり、悲しくなったり、あるいは無関心であったりすることはできません。しかし、つねに、自分の感情を、大きな地図の中に位置づけることを選択しているのです。すなわち、人間存在の高貴さという地図であり、人間存在が無常であるにもかかわらず、それは高貴なのです。あらゆる人間は、生きていることの驚きを経験することができます。そして、幸せや悲しみといったエピソードは、存在全体に美しさと尊厳さを付け加えるだけなのです。自分という存在を、人類という広大な山脈の中のある一つの莊嚴な山であると考えてみましょう。環境保全に尽力した哲学者であるジョン・ミューア (John Muir) がヨセミテの頂きを描いたように、自分自身を描いてみましょう。

「威厳のある平穩の中に反り返るものもあり、完全なあるいはほとんど完全に、彼らの連なりをさらに何

千フィートも超えて絶対的に聳え立つ、思慮深い態度のうちに嵐と平穩を同時に受け入れる。……厳しく不動の莊嚴さのなかに、これらの岩山は、なんとやわらかく飾られていることか。なんと素晴らしく、心強くその岩山は連なっているであろうか」⁽¹⁹⁾。

さらに、自然と交歓することによって莊嚴さの感覚が薫育されれば、人や物それ自体への執着に依存しない満足や幸せに導かれます。なぜなら、自然とは人でも物でもないからです。池田大作が撮影した莊嚴な自然の写真は、世界各地で展示されています。それらの写真は、深い莊嚴さを具現化しています⁽²⁰⁾。自然と共生している人の魂は、豊饒なすばらしい自然へと開かれた窓であるということを示しているのです。

自然との一体性というこの独特な概念は、本稿の末尾に示すように、人生の苦しみを克服するための高度な教えであります。この教えが、池田大作の写真によって暗黙のうちに伝えられていることは、偶然ではありません。彼は、ラルフ・ウォルドウ・エマソンや牧口常三郎が著作の中で説明したことを、非常に明確に

自覚しているのです。この教えの基礎をなす（正統なインド哲学から導き出された）仏教の理論は、たしかに簡潔で明解なものです。そこでは、現世の喜びや悲しみは、

主として私たちの執着心や嫌悪感から生じるとされま

す⁽²¹⁾。しかし、日蓮仏法の信奉者や、ニューイングラン

ドの超絶主義者たちは、さらに洗練された教えをもっています。その教えによると、人々は、自然の莊嚴さを認識することを通して、人間の尊厳性を獲得することができます。そしてまた人々は、季節の変化、流行の変化、欲望の変化、環境の変化といった絶え間ない変化にもけつして崩されることのない、すばらしい幸福を獲得することができます。超越的な幸福（エマソンの言葉によれば「完全なる充足 (perfect contentment)」は、不変なのです。なぜ不変なのでしょう。それは、（潜在的な）自然本体——（顕在的な）現象的自然を生み出す不変の源泉であり、それを補完するもの——との一体性に基づいているからです。顕在化していない自然は、目に見える四季の変化の中にあるものではありません。むしろそれは、四季の変化を生み出すものなので

す。同様に、「完全なる充足」も、目に見える日の出や日没の中には存在しません。むしろ、日の出や日没を知覚させるものなのです。

道教的な視点からいえば、「不完全な不満足感」は存在に依存するものであり、「完全なる充足」は非存在 (non-existence) に基づくものです。非存在に至る道、つまり人間の莊嚴さという完全なる充足を経験するための道は、自然の莊嚴さと一体になることによって達成されるのです。なぜなら、そのような一体性は、自然本体の次元において経験されるものであり、現象のみに限定される苦しみを免れているからです。

ここで、エマソンと牧口の言葉を引用して、本稿の結びとしたいと思います。もしもあなたが、この二人や私を信用しないならば、自然の中に自らを浸してみ、日の出や日没を見て感じたことをじっくりと考えてみるとよいでしょう。それらの現象をそれほどまでに美しくさせているものこそ、あなたの「完全なる充足」の目覚めなのです。

「大自然の中心に、一つの霊があり万人の意思を支配し

ている。万物を宿わせ、これを生かしている力と英知の流れの只中に浸たることです。すると努力しなくとも、真理と正義と完全な満足の境地に、いやがおうでも到達させられるものです⁽²²⁾。

ラルフ・ウォルドウ・エマソン

「人はかくのごとく外界との諸般の交渉により、円満なる発達をなすものなり。人生の幸福は、これが広狭親疎の程度に比例すると言ふも、大いなる不可なるべし⁽²³⁾」。

牧口常三郎

注

(1) 謝辞：この論題は二〇〇三年二月十四日に東京で一般聴衆向けに行われた公開講座のスポンサーとなって頂いた財団法人東洋哲学研究所による寛大な提案によるものである。本稿は、その講演原稿に私の新しい著書である『*The Big Questions: Therapy for the Sane*』, Bloomsbury, New York and London, 2003 からの抜粋を加え発展させたものである。池田大作氏のインスピレーションと、本稿作成にあたり私を励まし、また援助を惜しまれなかった創価学会インタナショナルと東洋哲

学研究所に感謝いたします。

(2) 多くのヴァージョンがある。たとえば『*The Word of the Buddha*』, trans. Nyanatiloka, Buddhist Publication Society, Kandy, Ceylon, 1981 を参照せよ。

(3) 私の息子は数少ない例外である。私は出産に立ち会ったが、彼は微笑みながら生まれてきた。

(4) ソクラテスもまたこのことに気づいていた。In the *Crito*, he said: "I only wish ... that the many could do the greatest evil; for then they would also be able to do the greatest good - and what a fine thing that would be!" See Plato, *Crito*, trans. Benjamin Jowett, Walter J. Black Inc., Roslyn, NY, 1942, 44d. (ソクラテス)『ソクラテス全集』, 田中美知太郎訳、岩波書店、一九七五年

(5) "As it is [sometimes] difficult to hit the mean exactly, we should take the second-best course ... and choose the lesser of two evils." Aristotle, *Nicomachean Ethics*, trans. James Wellon, Walter J. Black Inc., Roslyn, NY, 1943, Book 2, Chapter 9. (アリストテレス)『アリストテレス倫理学』, 高田三郎訳、岩波文庫、一九七三年

(6) E.g. See John Von Neumann and Oskar Morgenstern, *Theory of Games and Economic Behavior*, Princeton University Press, Princeton, 1946.

(7) E.g. see Epicurus: "Vain is the word of a philosopher

that does not heal any suffering of man. For just as there is no profit in medicine if it does not expel the diseases of the body, so there is no profit in philosophy either, if it does not expel the suffering of the mind." Fragment #54 from uncertain sources, see

Cyril Bailey, Epicurus: *The Extant Remains*, Oxford, 1926. (ヒュンロス『教説と手紙』, 岩波文庫、一九五九年)

(8) "And the most important aspect of my skill is the ability to apply every conceivable test to see whether the young man's mental offspring is illusory and false or viable and true. Plato," *Theaetetus*, trans. Robin Waterfield, Penguin Books, London, 1987, 150c. See also Pierre Grimes and Regina Uliana, *Philosophical Midwifery*, Hyparxis Press, Costa Mesa, CA 1998. (ソクラテス「ソクラテス全集」, 田中美知太郎訳、岩波書店、一九七五年)

(9) Buddha, *Dhammapada*, trans. Harischandra Kavirama, Theosophical University Press, Pasadena, 1980, Canto 9, Verses 127-28, & Canto 14, Verse 189. (『ブッダの真理の言葉・感興の言葉』, 中村元訳、岩波文庫、一九七八年)

(10) Daisaku Ikeda, *The Humanism of the Middle Way: Dawn of a Global Civilization*, SGI Office of Public Information, Tokyo, 2002 Peace Proposal, p.15. (池田

大作「人間主義——地球文明の夜明け」二〇〇二年のGIS日記念提言)

(11) Lao Tzu, *Tao Te Ching*, trans. Ch. u Ta-Kao, George Allen & Unwin Ltd, London, 1937, Ch. 31. (老子「道徳経」『中国古典選』, 朝日文庫、一九九一年)

(12) Attributed to W.H. Thorpe, in *Beyond Reductionism*, eds. Arthur Koestler and J. R. Smythies, Hutchinson Publishing Group, London, 1969.

(13) Lao Tzu, Ch. 63. (老子「道徳経」『中国古典選』, 朝日文庫、一九九一年)

(14) 「大地は皮膚を持つてゐる。その皮膚は病を持つてゐる。かかる病の一例は『人間』である」 Friedrich Nietzsche, *Thus Spake Zarathustra*, trans. Thomas Common, Project Gutenberg (on-line), 1999, Second Part, Ch. 40. (『ゾラーストラーの語』, 竹山道雄訳、新潮文庫、一九五三年)

(15) See *The Lotus Sutra*, trans. Burton Watson, Columbia University Press, NY, 1993, passim.

(16) From a letter to Charles Andrews, 5 March 1921, in Rabindranath Tagore: *An Anthology*, eds. Krishna Dutta & Andrew Robinson, Picadore, London, 1997, pp.169-73. (R・タゴール『タゴール著作集』, F・アンゲルズ編、福田隆太郎訳、第三文明社、一九八八年)

(17) Epicurus, fragment #85. (ヒュンロス『教説と手紙』,

岩崎允胤訳、岩波文庫、一九五九年)

文明社、一九九一年)

- (18) Henry David Thoreau, *Walden, Book-of-the-Month Club*, NY, 1996, ch.2. (H・D・シロー『ウォールデン』、酒本雅之訳、ちくま学芸文庫、二〇〇〇年)

(ルー・マリノフ／アメリカ実践哲学協会会長)
(訳・あわづ けんた／東洋哲学研究所研究員)

- (19) John Muir, *The Mountains of California*, Penguin Nature Classics, Penguin USA, NY, 1997, ch.1 (ジョン・ミューア『山の博物誌——ザ・マウンテン・オブ・カリフォルニア』小林勇次、立風書房、一九九四年)

(本稿は、二〇〇三年二月十四日に行われた講演内容に加筆
いただいたものです。)

- (20) See also Daisaku Ikeda, *Symphonic Poems with Nature*, The Soka Gakkai, Tokyo, 2000. (池田大作『心の交響詩』、創価学会、二〇〇〇年)

- (21) E.g. "Desire consumes and corrupts everything. It is man's greatest enemy." *Bhagavad-Gita*, trans. Shri Purohit Swami, Faber and Faber Ltd., London, 1969, ch.3. (『バガヴァント・ギーター』、上村勝彦訳、岩波文庫、一九九二年)

- (22) Ralph Waldo Emerson, "Spiritual Laws," *The Works of Ralph Waldo Emerson*, Vol. 1, G. Bell & Sons Ltd., London, 1913. (R・W・ヘンソン『ヘンソン全集』、平田禎木訳、日本図書センター、一九九五年)

- (23) Tsunesaburo Makiguchi, *A Geography of Human Life*, ed. Dayle Bethel, Caddo Gap Press, San Francisco, (publication year not indicated), p.31. (牧口常三郎『人生地理学』『牧口常三郎全集』、第三